I-1

宮脇檀の設計活動における主題の二面性について

「暮らし」と「まちなみ」に対する宮脇壇の葛藤をめぐって

The duality of the subject in Mayumi Miyawaki's design

Miyawaki Mayumi's conflict with "Living" and "Machinami"

○倉成湧貴[1] 田所辰之助[2]

*Yuki Kuranari[1] Shinnosuke Tadokoro[2]

Mayumi Miyawaki is an architect who was active in a wide range of fields such as design of houses, banks, and residential area and writing essay since the 1970s. Throughout his life, he has questioned "the activities that should be there" and advocated improvements in human life and the urban environment. He also continued to reflect this opinion in his architectural works. More than 20 years after his death, the environment surrounding houses and cities face turning point. Through this research, I would like to look back on the idea he had asserted and think about future life and the urban environment.

1.序論

1-1.研究背景

社会の変化が激しい現代、都市や住宅を取り巻く環境は大きく動こうとしている. そのような中で人々の生活や都市のあり方への再考が促されつつある。本研究では、現代日本の生活につながる 1970 年代以降の住宅やそれを取り巻く都市について検討する. なかでも、各地の集落などに赴いてデザインサーベイを行い, 都市や生活について論じてきた建築家・宮脇檀に着目する.

1-2.研究目的

宮脇の住宅設計やまちづくり, 著書の内容の変遷を通じて, 生涯に渡って貫いてきた「暮らし」と「まちなみ」という主題の「二面性」に着目し, 調査を行う. 既往研究では, 「暮らし」に関する研究論文が多数存在するほか, 「まちなみ」や後年の住宅地開発に対しての論文は土木学会で挙げられたものや雑誌『家とまちなみ』に掲載された内容などがあるが, それぞれの側面を総合的に捉えようとする視点はあまり見られない. また, 宮脇は, 一連の住宅設計のみならず, 生活の基盤となる都市に対しても強い問題意識を持っていたことが窺えることから, 宮脇の「まちなみ」観について検証する.

1-3.研究方法

本研究では, まず始めに宮脇の設計活動における主題の「二面性」が確認できる主要論考及び作品を取り上げ, 思想の変遷がどのような手法を通じて作品化されているのかを捉える. 続いて, 宮脇の設計活動の全体像を把握した上で, とりわけ 1970 年代後半以降の住宅地設計や住宅論を参照し, 当時の社会的背景も踏まえながら、宮脇がどのように「まちなみ」を捉えていたのか、その詳細について検討する.

2. 宮脇檀の設計活動における二面性の表出について

宮脇は, 生涯にわたって住宅を設計し続けた住宅作家として知られる建築家である. 大学時代には, 吉村順三の下で建築を学び, 大学院では高山英華のもとで都市計画を学んだ.

在学中の設計の仕事で得たお金を使い, 日本一周を試みるが, この時に日本のまちなみの美しさに感動を覚えることとなった. これが後のデザインサーベイにつながることになる. 修士課程修了ののち, 設計事務所を３年ほど務めた後独立し, 事務所を構えるようになったのと同時に、法政大学で教鞭を取るようになった. この時に伊藤ていじの論考などに触発される形で倉敷をはじめ各地のデザインサーベイを行った[1]. デザインサーベイを通じて, 集落の景観と構造を分析し, 視覚的資料にまとめている. 後年の住宅地設計においては大きく反映されることになった.

一方, 宮脇が独立を果たした 1960 年代後半は「建築の解体」に代表されるように建築界全体がモダニズム以降の様式について考えるようになった時代であった. 宮脇は「デザイン以前のデザイン」[2]にあるように「デザインとは決して形の細部を作り出すことではなくて, この秩序の感覚に従いながらそこに何かを付け加えていくことにある」とし, デザインに対する意味をなくしていくような考え方を示し, 自邸の増築で実践を図った. これを発展させる形で「プライマリィ・アーキテクチュア論」[3]を完成させることになる。この建築論を後述する秋田相互銀行の支店群で実践していくことになった. このような形で一元的な建築論を確立させたものの, 翌年には「教条と生硬で一方的な論理は自らが傷つかないための鎧でしかなくて、他を傷つける道具にもなる。弱い奴ほ

１：日大理工・院（前）・建築　２：日大理工・教員・建築

ど教条に頼りたがる」[4]などとした上で、一度確立させていた建築論を自らの手で変化させていくことになった.

こうした経緯を経て, 二面性をもった展開を論考のみならず, 作品も含めて行っていくことになる.

3.宮脇檀の主要作品における「まちなみ」観

3-1.秋田相互銀行盛岡支店

宮脇が設計した銀行建築の第 1 号.「プライマリィ」を最も忠実に実現させている.シンボルとしての建築を目指し,形態のみならず,色彩に対しても多くの工夫が存在している.一方で、「プライマリィ」の空間を内部にまで広げたため,人間のための空間とはなっておらず,多様性に欠けてしまった.これが,その後の支店や「ボックス」につながることになる.

3-2.秋田相互銀行角館支店

一連の銀行建築の中で最後に手がけた作品.盛岡支店以後,社会状況が大きく変わったことを背景に,他支店の設計では理想的だった「プライマリィ」から,現実を受け入れた形に変化させる必要に迫られていた[5].そんな中で依頼されたのがこの「角館支店」である.敷地は,伝統的建造物保存地区外ではあったものの,隣接して土蔵がある場所だった.デザインサーベイを行い,伝統的な町並みに感銘を受けていた宮脇は,ここで強い葛藤に晒された.

「僕は地域に対しては可能な限りの配慮はするけれど,周辺の個々の建物に対してはアイデンティティを主張した建物を設計すれば済んでいた.・・(中略)・・プライマリィの原型とそのバリエーションと可能性を追求していれば済んだ」が,角館支店の設計を前にして,「どう土蔵と取り組むかが勝負だなと感じざるを得なかった」としている[6].実際には,土蔵の形態に合わせる設計を行い,完成させた.この時にデザインサーベイの活動が活きたとしており,翌 1977 年から手がけることになる住宅地設計にも応用されることにつながる.

Figure1. Akita Sogo Bank Kakunodate Branch

3-3.ボックスシリーズ

「プライマリィ」を住宅の設計に向けたとき, 内部空間は生の人間が生々しく生きる場所であり, 秋田相互銀行盛岡支店のような形態にするのは困難だと考えた宮脇は, 外部と内部の関連性を持たせないようにすることで, 解決を図った。「ブルーボックスハウス」を皮切りに, 内部の木造の間仕切りが生活空間を形作り, 「ボックス」シリーズへとつなげた.

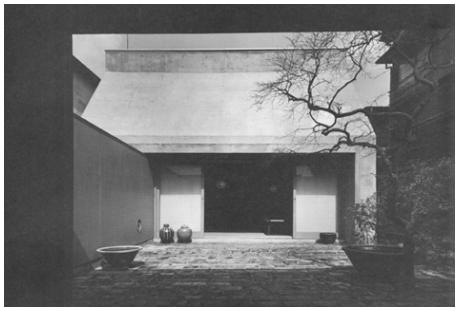

Figure2. Matsukawa Box

4.まとめ－宮脇壇の「まちなみ」観とその後の活動

宮脇の「まちなみ」観に着目して, 論考や作品を検証していくと一連のつながりを知ることができた. 中でも, 「秋田相互銀行角館支店」の設計が「まちなみ」に対する意識を大きく変化させ, 銀行単体の建築から住宅地設計の空間意識につながるという点は宮脇の 1980 年代以降の動きを捉える上で重要になると言える. また, 意識が生活環境や伝統空間に向いたことで, 1980 年代以降のポストモダニズムへは関与することがなく, 独自の立場を貫いたとも考えられる.

[参考文献]

[1]別冊新建築　日本現代建築家シリーズ①　宮脇檀 p171-186 新建築社　1980

[2]新建築　p204-207　新建築社 1970 年 2 月号

[3]建築文化　p111-114 彰国社　1970 年 8 月号

[4]新建築　p183-186　新建築社 1971 年 9 月号

[5]新建築　p183-186　新建築社 1976 年 8 月号

[6]新建築　p212-213　新建築社 1977 年 5 月号

[7] 住宅建築設計例集・9　混構造住宅　宮脇檀建築研究室作品集　p20-27 建築資料研究社　1984

[8]家とまちなみ p2-23 住宅生産振興財団 2013 年 3 月号

[図版出典リスト]

Figure1: 別冊新建築 日本現代建築家シリーズ① 宮脇檀 p122 新建築社　1980

Figure2:住宅建築設計例集・9　混構造住宅　宮脇檀建築研究室作品集　p110 建築資料研究社　1984